様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２０年　４月　２５日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９８２００５２
研究課題名（和文）　近代日本文学・文化のジャポニズム受容に関する総合的研究

研究課題名（英文）　A Comprehensive Study of Japonism in Japan
; The influence on Japanese literature and culture

研究代表者
西村　将洋（NISHIMURA MASAHIRO）
西南学院大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：70454923

研究成果の概要：本研究は、19 世紀から 20 世紀へと移行する世紀末転換期から、1945 年の第二次世界大戦終結までの期間を対象として、ヨーロッパで形成されたジャポニスムの内実を検討しつつ、その上で、日本人がジャポニスムをいかに受け入れ、そして、いかなる日本イメージを再構築したのかを調査・考察した。

研究成果は大きく以下の４点にまとめられる。

(1)ロンドンでの文献調査
ロンドンの専門機関を利用して、1910 年に開催された日英博覧会や、同時期のロンドン演劇界に深く関わった劇作家・舞踏研究家の坪内士行の足跡を調査し、1910 年代の日英異文化交渉の一端を明らかにした。

(2)ジャポニスムに関する日本語文献の収集と分析
当時の日本人によるヨーロッパの旅行記やジャポニスム関連文献を収集することで、日露戦争（1904-1905 年）前後から第二次世界大戦終結までの期間を対象として、通史的な観点から、ジャポニスム概念の質的な変化を析出した。

(3)1910 年代のイギリス・ジャポニスムと日本人についての考察
イギリスのジャポニスムと日本人の関係を探るために、特に 1910 年代に注目し、日英博覧会、演劇批評、文芸批評の観点から、日英異文化交渉の一面を明らかにした。具体的には、1910 年代前後にイギリスを訪れた長谷川如是閑、坪内士行（作家・坪内逍遙の息子）、長谷川天渓らの異文化体験について考察を加えた。

(4)1930 年代～1940 年代の日仏文化交流についての考察
1930 年代から 1940 年代にかけてのパリにおける日本文学紹介や、異文化交渉の状況を調査した。具体的には、川路柳虹、松尾邦之助、坂本直道（坂本龍馬の末裔）、藤田嗣治について考察を加えた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,200,000	0	1,200,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,200,000	300,000	2,500,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：日本文学
キーワード：比較文学、美術史、思想史

１．研究開始当初の背景

「これまでの研究活動の継続性」と、「近年の先行研究との関連性」の２点から、本研究の背景を説明する。

〔これまでの研究活動の継続性〕

研究代表者は、先に平成 16～平成 18 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成をうけ、「日本の伝統性と一九三〇年代モダニズムの相互交渉に関する学際的文学研究（課題番号 16・5437)」（以下「学際的文学研究」と略記する）に取り組んだ。本研究はその内容を引き継ぐものである。

「学際的文学研究」では、和歌や俳句といった短詩型文学や、日本の伝統的建築（例、茶室など）を考察対象として、それらの日本文化の伝統性が、1930 年代のモダニズム（主にフランスとドイツのモダニズム）を経由することで、新たな意義を獲得した歴史的なプロセスを探り、データベースの作成と理論的な考察を行った。

しかし、その研究を進めるなかで、日本の伝統性と西欧モダニズムの交流は、1930 年代に先立つ世紀末転換期からの歴史的連続性を考慮に入れなければ、その実体解明が困難であることが判明してきた。加えて、第一次世界大戦前後にヨーロッパ各地で発生した西欧モダニズムが、ジャポニスムと切り離せない側面があることも明らかになってきた（例えば、20 世紀初頭のドイツ表現主義や、1910 年代半ばに英国で発生した Vorticism は、いずれも日本の俳句に関心を寄せていた)。

これらの問題点を踏まえ、「学際的文学研究」で蓄積したデータベースを活用しながら、さらに日本の異文化交渉史の実体解明を進展させることが、本研究の主眼である。

〔近年の先行研究との関連性〕

したがって、本研究には日本文化の伝統性とモダニズムとの混交状況を探るという問題設定が内包されている。この点は、美術史研究者 Claudia Delank がドイツのモダニズム運動（バウハウスなど）と日本文化との関連を考察した、"*Das imaginaere Japan in der Kunst. 'Japanbilder' vom Jugendstil bis zum Bauhaus*"（1996 年）と視野を共有しており、さらに、戦間期日本における伝統性への回帰を、近代化との関連で論じた、Harry Harootunian "*Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan*"（2002 年）とも接近した問題意識に立脚している。

また、近年の日本国内における研究状況に眼を転じるならば、ワタリウム美術館で開催された展覧会「岡倉天心――日本文化と世界戦略」（2005 年）や、学術研究書でいえば、五十殿利治ほか編『クラシックモダン―1930 年代日本の芸術』(2004 年)、鈴木貞美ほか編『わび・さび・幽玄――「日本的なるもの」への道程』(2006 年）など複数の分野で、日本の伝統性を近代性（モダニティ）との関連性から解明しようとする研究が進められている。

これらの成果に学びながら、20 世紀のジャポニスムと日本人との関係の再考を目指すこと、それが本研究の学術的な背景である。

２．研究の目的

19 世紀半ば、ヨーロッパの美術シーン（絵画・工芸品などの分野）に日本趣味（仏：Japonisme、英：Japonism）の波が押し寄せた。このジャポニスムについて、これまでの研究では一つの思考の枠組みが前提となってきたように思う。それは「日本文化がヨーロッパの文化にいかなる影響を与えたのか」という論点への関心である。こうした観点からの研究の蓄積は、ヨーロッパと日本の文化交流の歴史的実状を解明する上でも、複数の重要な資料や論点を示したといえるだろう。だが、ヨーロッパ諸国で発生したジャポニスムの潮流は「日本文化からヨーロッパへの影響」という一方通行的な図式に収まるものではなかった。

その点が具体的に顕著となるのが、19 世紀から 20 世紀へと移行する世紀末転換期である。この時期、日本人によるジャポニスム受容が本格化し、ヨーロッパ諸国で形成された様々な日本イメージに触発されるかたちで、日本人自身による新たな日本イメージの再構築が始まるのである（例えば、1903 年にロンドンで刊行された岡倉天心"*The Ideals of the East*"（東洋の理想）はその筆頭に挙げることができるだろう)。

言い換えるならば、日本人は、異文化（ヨーロッパ諸国の文化）を経由することで、自国文化の未知の領域に出会ったのだといえよう。ここで生成していたのは、単なる一方

向型の影響関係ではなく、日本とヨーロッパの境界（中間）領域における、双方向型の錯綜するシステムであり、異なる傾向と異なる傾向が、接触や融合を繰り返しながら互いに変動していく、「文化のダイナミズム」とでもいうべき問題系である。

本研究の目的は、こうした文化の「双方向の関係」を考察し、異なる傾向が融合する際の異文化交渉の実体解明を目指すことにある。

３．研究の方法

大きく、以下の４点に分かれる。

(1)ロンドンでの資料調査

イギリス・ジャポニスムと日本人との関連を考察するために、University College London Library などの専門機関を利用して、1910 年に開催された日英博覧会や、同時期のロンドン演劇界に深く関わった劇作家・舞踏研究家の坪内士行（作家・坪内逍遙の息子）の足跡について調査した。加えて、士行がロンドンで交際した舞台装置家ゴードン・クレイグについて、クレイグが発行した英文雑誌を調査し、イギリス演劇とジャポニスムとの接点を探った。

(2)ジャポニスムに関する日本語文献の収集と考察

ジャポニスムに関する先行研究を収集するとともに、日露戦争（1904-1905 年）前後から第二次世界大戦終結までの期間を対象として、日本人のヨーロッパ滞在記やジャポニスム関連文献を収集し、通時的な観点から、ジャポニスム概念の歴史的変遷を考察した。

(3)1910 年代のイギリス･ジャポニスムと日本人についての考察

イギリスのジャポニスムと日本人の関係を探るために、特に 1910 年代に注目し、日英博覧会、演劇批評、文芸批評の観点から、考察を行った。具体的に考察したのは、長谷川如是閑、坪内士行、長谷川天渓の３名である。以下それぞれの調査方法について具体的に説明する。

ジャーナリストの長谷川如是閑は、『大阪朝日新聞』の日英博覧会特派員として 1910 年にロンドンを訪問している。この如是閑の足跡を探るために、『大阪朝日新聞』に連載された如是閑の記事「聞いた日英博と見た日英博」(『大阪朝日新聞』1919 年 5 月 12 日～15 日）や、著書『倫敦』（政教社、1912 年）などに注目し、考察を加えた。

劇作家・舞踏研究家の坪内士行（作家・坪内逍遙の息子）については、士行による自叙伝『越しかた九十年』（青蛙房、1977 年）のほかに、『西洋芝居土産』（冨山房、1916 年）、『金髪のもつれ』（蒼生堂、1919 年）などの著書、さらに 1910～1920 年代に日本の文芸雑誌等に発表されたイギリス演劇に関する文献を調査した。

文芸評論家の長谷川天渓は、出版社・博文館から海外出版事業の視察という命を受けて 1910 年から約２年間ロンドンに滞在している。この間、天渓は博文館の雑誌『太陽』に断続的にロンドン滞在記を発表しており、それらの資料を調査することで、天渓とイギリスとの関連を探った。

(4)1930 年代～1940 年代の日仏文化交流についての考察

1930 年代から 1940 年代にかけて、日本人のパリ滞在経験者たちは、東京で巴里会を結成している。この巴里会は、1934 年から 1943 年まで機関誌『巴里』『アミ・ド・パリ』『あみ・ど・ぱり』を発刊した。この雑誌を調査・分析するだけでなく、巴里会に関連する新聞や雑誌の記事を調査することで、1930 年代のパリで行われていた日本文化紹介の実体や、当時の政治的なレベルでの日仏提携論について考察を加えた。

具体的には、川路柳虹、松尾邦之助、坂本直道（坂本龍馬の末裔）、藤田嗣治などの人物の動向に注目した。

４．研究成果

大きく、以下の４点にまとめられる。

(1)ロンドンの専門機関を利用して、1910 年にロンドン西郊の新開地シェパーズ・ブッシュで開催された日英博覧会の公式記録や、劇作家・舞踏研究家の坪内士行が交流した演出家･俳優のロレンス･アーヴィング（シェイクスピア舞台で有名なヘンリー・アーヴィングの次男）に関する資料、さらに舞台装置家のゴードン・クレイグが発行していた英語雑誌について調査することができた。これらについては、共編著『言語都市・ロンドン』（藤原書店、2009 年 6 月刊行予定）に成果をまとめた。（下の図版は、日英博覧会の公式資料より。博覧会会場入口に建設された春日楼門の写真）。

(2)日本国内で刊行された関連図書・雑誌についての文献収集を行うことで、日本人のジャポニスム受容に関するデータを作成した。このデータを活用することで、通時的な観点からジャポニスム概念の変遷を考察した。その結果、１９世紀から２０世紀にかけての世紀末転換期に、ジャポニスム概念の質的な変化があったことがわかった。
この点については、西南学院大学国際文化学部談話会（2008 年 3 月）で「異邦のニッポン――西欧モダニズムと〈日本〉像の関係学・序説」と題する口頭発表を行い、現時点での研究の概要をまとめるとともに、発表後の質疑応答を通じて、今後の研究の問題点や指針などを得ることができた。

(3) 1910 年代にロンドンに滞在した日本人について調査することで、当時のジャポニスムが日本人に与えた影響について考察した。具体的には以下の３点を論じた。

①ジャーナリストの長谷川如是閑と日英博覧会について
日英博覧会の政治的な背景を探るとともに、博覧会そのものの検討を行った。具体的には、日英博覧会では「台湾村」「アイヌ村」の他に「日本村」が作られており、「人間の展示」が行われていた。ジャーナリスト長谷川天渓のロンドン滞在記を通じて、それらの異文化交渉のズレについて考察を加えた。

②劇作家・舞台評論家の坪内士行とイギリスの前衛舞台との関連について
坪内士行が交流した舞台装置家ゴードン・クレイグは、非写実的な舞台装置を最も前衛的で現代的な傾向として考えており、そうした舞台装置のヒントとして、日本の「能」の舞台に強い関心をもっていた。坪内士行のロンドン体験記を通じて、前衛舞台と日本の伝統的な舞台との接点を考察した。

③文芸評論家の長谷川天渓と国家概念の変容について
長谷川天渓は、渡英の前後で、全く異なった「国家」概念を展開している。その変化の大きなきっかけとなったのが、ロンドンで接した女性解放運動だった。天渓のロンドン滞在記や、帰国後後の文章を考察することで、精神分析学やジェンダーと国家概念の関連を探った。

以上の調査・分析により、日本の伝統性が、異文化との接触により、様々に変容しながら再発見されるプロセスの一面を解明することができた。これら３点については、共編著『言語都市・ロンドン』（藤原書店、2009 年 6 月刊行予定）に成果をまとめた。

(4)1930 年代～1940 年代の日仏文化交流について調査した。1920 年代のパリでは、松尾邦之助らを中心とする日本文化紹介が行われており、その活動を日本に紹介した川路柳虹の役割や、パリの満鉄事務所に勤務した坂本直道（坂本龍馬の末裔）が、1930 年代のパリで行った活動（日仏同志会 Comité Franco-Japonais）の政治的な背景、さらに、画家の藤田嗣治が監督した対外宣伝映画「Picturesque Japan」について考察した。これらの成果は、編著『パリへの憧憬と回想――「あみ・ど・ぱり」Ⅲ』(ライブラリー日本人のフランス体験、第 5 巻、柏書房、2009 年 6 月刊行予定)にまとめた。

以上４点についての調査と考察によって、戦前の日本人と西欧ジャポニスムとの関係の実態解明を進めることができただけでなく、他にも重要な問題点を発見することができた。それらの新たな論点については今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計　４　件）

①西村将洋,「長谷川如是閑――日英博覧会の特派員」, 共編著, 『言語都市・ロンドン』, 藤原書店, 査読無, 2009 年 6 月（刊行予定）, ページ数は未確定。
②西村将洋,「坪内士行――ロンドンの日本人役者」, 共編著, 『言語都市・ロンドン』, 藤原書店, 査読無, 2009 年 6 月（刊行予定）, ページ数は未確定。
③西村将洋, 「長谷川天渓――自然主義からフロイトへ」, 共編著, 『言語都市・ロンドン』, 藤原書店, 査読無, 2009 年 6 月（刊行予定）, ページ数は未確定。
④西村将洋, 編著,『パリへの憧憬と回想――「あみ・ど・ぱり」Ⅲ』(ライブラリー日本人のフランス体験 第 5 巻), 柏書房, 2009 年 6 月(刊行予定), 総ページ数は未確定。

〔その他〕
西村将洋, 口頭発表,「異邦のニッポン――西欧モダニズムと〈日本〉像の関係学・序説」, 西南学院大学国際文化学部談話会（2008 年 3 月）。

６．研究組織
(1)研究代表者
西村　将洋（NISHIMURA MASAHIRO）
西南学院大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：70454923

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし